
邪神像の微笑み

なんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

邪神像の微笑み

【Nコード】

N7795C

【作者名】

なんじ

【あらすじ】

少年探偵団は、千葉刑事が橋の上でなにやら悩んでいる様子を見つける。その、悩みを解決しようとするコナンだが。

夕闇の色が、かすかにあたりを染め始めた時刻。

少年探偵団達は、一人の男が橋の上で、

なにやら迷っている様子なのに気付いた。

欄干越しに手を川の上に伸ばす。

そして、引っ込める。

そのまま立ち去ろうとして、またもとの場所に戻る。

また、手を川の上に・・・。

「あれ、千葉刑事じゃねえのか？」。

「そうよ、千葉刑事よ。」

一体どうしたのかしら？」

「捜査結果に矛盾する証拠でも捨てようとしてるんじゃないかしら？」

元太、歩美の心配とは裏腹の、

いつもながら、白々とした口調の哀だった。

「それって、いけないことなんじゃあ」

光彦は千葉の姿をにらみつけた。

“灰原、子供をからかうなよ”

コナンは、心の中で、そう思った。

「とにかく、行ってみようぜ」

千葉は近づいてくる少年探偵団を見ると慌てた様子で、逃げ出そうとした。

が、一歩踏み出した所で、首を横に振り、立ち止まった。

そして、決まりの悪そうな笑顔で、探偵団達が近づいてくるのを待った。

「千葉刑事、何か心配な事でもあるの？」

「一体何を捨てようとしてたんだよ」

詰め寄る少年探偵団に苦笑しながら千葉は言った。

「実はね、捨てたい物があるんだけど、なんか捨てにくくって困ってるんだ」

そう言って、少年探偵団の目の前に差し出された物。

それは、一体のフィギュアだった。

哀が、うれしそうに言った。

「あら、邪神像じゃない」

「邪神像？」

コナンは、いぶかしげに哀の顔を見た。

「これって、ジャガイモ女王の人形だよ、な」

眉をひそめて元太が言った。

「でも、なんか、不気味ですよ。」

映画の女王は、もっときれいでしたよ」

「私の持つてる、ヤイバーグミのおまけの方が綺麗」

歩美の言葉に、千葉は血相を変えた。

「あ、歩美ちゃん、あのレア物のジャガイモ女王の食玩、持つてるのかい？」

千葉の迫力にたじたとになりながら歩美は答えた。

「うん、お母さんが、おやつに買ってくれたグミの中に・・・」

「頼む！それ譲ってくれ！」

「いいよ、私、ヤイバーの方が、欲しかったんだし」

千葉は、歩美の言葉を聞いて、天国にいるかのような表情で言った。

「ヤイバーのが欲しかったら、僕のを上げるよ。」

ヤイバーキックのと、決めポーズのとどっちがいい？」

「うわあ、そんなに色々持つてるの？！

千葉刑事ってすごい」

感心する歩美と反対に、哀が肩をすくめた。

「千葉刑事、ジャガイモ女王の食玩のためにどのくらいグミを買っ

たのかしら？

まあ、邪神像のために二万円も出すくらいなら、さぞかし・・・」

「に、二万円？！この人形が、二万円ってことか？」

愕然としてコナンは叫んだ。

元太達も、コナンに続いた。

「何で、こんなジャガイモ女王と似ても似つかねえ人形が二万円もするんだよ」

「千葉刑事、だまされたんじゃないの？」

「刑事が詐欺に会うなんて、困ったもんですね」

千葉は、力なく笑うばかりで答えようとしない。

哀がその代わりの様に言った。

「映画のせいで、ジャガイモ女王の人気が出たでしょ。」

それで、製作元が、マニアを当てこんで

ジャガイモ女王の、一体二万円もする限定版フィギアを売り出したの。

その完成品の画像も無いのに、マニアは先を争って予約をした。で、そのお品がこれなわけよ」

うつむいて千葉が言った。

「そうなんだ」。

あんまり腹が立ったんで、捨てようかとも思っただけど、なにせ二万円だし、それに・・・」

「呪いも、怖いし、でしょ。千葉刑事」

微笑む哀に、光彦が聞いた。

「それって、『ヤイバニカ』の掲示板に載ってた奴ですか？」

「おい、『ヤイバニカ』ってなんだよ」

話題に乗り損ねたコナンは、少しばかり、口を尖らせながら聞いた。

「『エンサイクロペディア・ヤイバニカ』って言う、大手老舗の仮面ヤイバーサイトよ。」

頭の固い探偵さんは、こんなサイトを見ないのかしら？」

「ったく。で、呪いって言うのはなんだよ」

「ジャガイモ女王のフィギアのあまりの出来の「良さ」に処分をしようとした人たちの身に恐ろしい事が降りかかる、って言うつわさよ。」

まあ、一種の都市伝説。

いろいろ有るけど、有名なのは

「戻ってくる女王」って奴よね、円谷君」

うれしそうに光彦は、灰原の話を継いだ。

「つまり、この女王像は、捨てても戻ってくるんですよ。」

ゴミ捨て場に捨てたはずなのに、目が覚めたら枕元にあった、とか川に投げ捨てて、家に戻ったらずぶぬれの女王像が玄関にあった、とか

だから、この像は、実は、邪神となったジャガイモ女王の双子の姉だ、

という話も出ているんですよ」

「だから邪神像か」

コナンが腕組みをして言った。

「で、千葉刑事、そんな事まさか・・・」

コナンの言葉を千葉は、明らかに作り物と分かる笑顔で、遮った。

「もちろん信じてるわけじゃあないよ。」

でも、むげに捨てるのも、かわいそうだし、

できれば、喜んでもらってくれる人がいたらなあ、とは思ってるんだけど」

「喜んで、もらってもらえたら、『彼女』は帰ってこないそうだしね」

楽しそうに哀がいった。

「これ喜んでもらってくれる人・・・むずかしそうですねえ」

口々に話す探偵団にまぎれて、

小声で、コナンが哀に話し掛けた。

「お前、えらくうれしそうだな」

「あら、他人の不幸は蜜の味、っていうじゃない」

「おい・・・」

そして、コナンは大きな声で言った。

「千葉刑事、僕、その人形、喜んでもらってくれそうな人、知っているよ」

驚きの視線がコナンに集中した。

「うつわあゝ、頬擦りしてますよ」

「しんじられねえなあゝ」

「蓼食う虫も好き好きということね」

壁中に貼られた薄気味の悪いポスターに囲まれながら、

探偵団達は小声で話していた。

歩美は声も出せず、コナンにぴったりとくっついて座っている。

「いやあ、ホントにありがとう。」

これで、今度の映画のヒロインは決定さ。

欲しかったんだけど、色々他の事で経費がかかっちゃてさ」

うれしそうに、四谷 岩久が言った。

「そうだ、皆に映画が出来たら見せてあげるよ。」

福浦監督の『亡霊船長』も真つ青のすごい映画にするつもりなんだ」

五人の探偵団員と一人の刑事は、それを固く断り、

彼の部屋から出ようとした。

と、四谷が言った。

「そうそう、刑事さん。」

戻ってくる女王の、別バージョン知ってる？」

千葉が振り返った。

「『彼女』は降臨すべき場所を自分で選んでいるんだ。

だから、選ばれない者の元からは、彼女は去っていく。

けれど選ばれた者の元には、

たとえ、いくら手離しても、自分の分身である

このフィギュアを、また送り込むんだよ。

刑事さんは絶対、彼女に選ばれているよ。

だつて額に印がついてるもの」

探偵団は、いっせいに千葉を見、彼は慌てて額に手をあてた。
四谷が笑った。

「怖かった？冗談だよ」

「ああ、怖かった」

アパート前の道路で歩美が、大きな息を吐いた。

「まあ、あれだけ気に入られたら、フィギュアだって、あそこを出る気はしないわよ。」

千葉刑事、安心してお休みなさい」

哀の、皮肉なのか、暖かなのか分からない
言葉に送られて、千葉は、家路についた。

そして翌朝、目が覚めると、幼い日のクリスマス以来した事の無い
事をした。

そう、枕元に何か無いかと、探し回ったのである。

何も無い事が分かると、千葉は、安堵して本庁に登庁した。

「あれ、千葉。何かいい事あったのか？」

話し掛ける高木を、軽くかわしていると、

佐藤が、赤いリボンをかけた包みを持って高木の方へ近づいてきた。
周りの刑事がいっせいに、羨望と嫉妬の目で高木を見る。

高木は、その視線を浴びながらも、うれしそうに佐藤に挨拶する。

と、佐藤は、高木にはなく、千葉に、その包みを差し出した。

「千葉君、これ面白い物なんだけど、

千葉君なら、好きかな？」と思つて」

高木を含めた、周りの刑事の視線が、信じられないという気持ちを
露わにして、千葉と佐藤を見つめた。

千葉は、喜ぶべきだと思つた。

しかし、何かが、千葉の胸に不吉な物を告げていた。

千葉の表情のためらいを佐藤は察知した。

「あ、迷惑なら・・・」

と、高野が千葉の前に笑顔で現れた。

「千葉、まさか美和ちゃんからの贈り物をむげに断るわけじゃあるまいなあ」

周りすべての刑事の視線が同じ事を千葉に言っている。

「い、いや、あの、そうだ、高木。高木に・・・」

「あら、これは高木君の趣味じゃないもの。」

千葉君のために持ってきたんだから」

佐藤の言葉に引きつった笑みを浮かべながら高木は千葉に言った。

「ということだそうだ、千葉。」

ありがたくもらっとけよ。」

「そうだそうだ、一生離すなよ！」

千葉の心も知らず、嫉妬の入り混じる声もどこかでする。

千葉は、観念して佐藤から包みを受け取り、リボンをほどいた。

現われた『彼女』は確かに千葉に微笑みかけた。

都市伝説は今、真実となった。

(終り)

（後書き）

「トンデモないフィギュアを買ってしまった方の心の叫び」という感じのサイトを拝見した事がこのお話の元となりました。

実際、その写真も載ってました。

元となった、絵は、とっても可愛い女の子なのに、

確かに「コワイ」（^^）

二次元を三次元に直すのって難しいんですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7795c/>

邪神像の微笑み

2010年10月10日15時35分発行